

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04832

研究課題名（和文）英語学習に難しさをもつ学習者支援 - 音韻符号化能力養成の観点から

研究課題名（英文）Teaching English to learners with learning differences-Developing phonological awareness

研究代表者

飯島 睦美 (Iijima, Mutsumi)

群馬大学・大学教育・学生支援機構・教授

研究者番号：80280436

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ローマ字読書き能力と英語学習で重要な役割を果たす音韻意識の関係を調査し、音韻意識を養うための教材や指導方法を開発することを目的とした。ローマ字の読書き能力においては、平仮名をローマ字で綴ることよりもローマ字を平仮名に直すほうが、中高生の学習者には難易度が高く、ローマ字の読み能力と英語の音韻意識との間には相関があり、さらに英語の読書き能力と英語全般の成績とは高い相関があることがわかった。

音韻意識を養成するための教材、指導方法は、系統的なシラバスに基づいて実施すること、また中学校入学時に実施することで、その後難易度が上がっていく英語学習へのスムーズな橋渡しとなることが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語教育改革の大きな柱のひとつである小学校英語教育を有為なものとするために、これまでに起こっていた中学校1年時の英語嫌いを大量に作り出すことが低学年化することだけは回避しなければならない。重要なのは、小学校で学習したローマ字能力を考慮しながら、英語の音韻意識を養成することであることが今回の研究で明らかになった。英語学習を苦手とする学習者の中には、やはりアルファベットの音と文字が同定していないものが多く、それがために中学校以降の英語学習についていけない現状が調査の中で浮き彫りになってきた。このことは、小学校や中学校初年次での英語教育へ音韻意識を高める指導の重要性を示唆するものとなった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explain how the Romaji literacy is related with the English literacy from the point of phonological awareness, and then suggests useful materials and teaching ways to develop learners' phonological awareness.

The results show that the phonological awareness is highly correlated with Romaji writing ability but not with Romaji reading ability. Writing needs decoding a sound to a grapheme and knowledge of spelling, which the high correlation between Romaji writing ability and the phonological awareness ascribes to. And also the findings present English literature, reading and writing alphabets, is highly related with English proficiency. The comments by junior high school teachers say that students who had struggled in class became to face up and try to answer the questions in a test, where they used to leave many questions unanswered. The confidence of learners as well as learning ways is the most important and essential to develop their abilities.

研究分野：英語教育

キーワード：英語学習 音韻意識 学習障害 ローマ字

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始までに3件の科研費の助成を受け、様々な学習者にとっての有効な英語学習方法・指導方法の研究を行い、且つそれらを英語教育現場で実践をし、検討を重ねてきた。

1件目の研究では、メタファー能力と外国語学習能力との関係を考察し、言語曖昧性に対する耐性と言語的思考力の重要性を提唱し、英語学習過程において、学習者に認知的負荷をかける課題を繰り返す指導を行うことで、認知力強化につながり、英語読解力や英文構成への敏感さが高まり、学習者の英語成績の向上につながる可能性があるということを提案した。しかし、成績向上が観察されたのは、成績中位以上であり、この授業活動で明らかに取り残されてしまった一部の学習者集団の存在に気付かせられた。

そこで、2件目の研究では、1件目の研究で明らかになった課題である、一般的に有効とされる教授法では英語能力が養成しづらい学習者の個別要因に注目し、学習者が直面する学習上の難しさを想定し、要因を特定したうえで、適切な学習方法や指導方法の提言を行うアセスメントツールの開発に取り組んできた。この研究では、学習者の音韻符号化能力が英語学習上大きなカギを握る要因と考えられることが研究成果のひとつであった。

2件目の研究と同時進行となった3件目の研究では、2020年度の小学校英語教科化全面実施に向けて、通常学校・学級における英語教育の特別支援を小中高の連携をキーワードに研究を続けた。小学校、中学校、高校の現職英語教員からそれぞれの学校種において、なんらかの特性を持ち、英語学習に困難をきたしている学習者についてのアンケートを実施、現場の実態把握を行った。中学校、高校に共通する、学習者に頻繁にみられる学習上の難しさがあることが確認された。教育現場での指導をサポートすることを目的とした、困り感毎の授業内活動例を集め、現場へ発信することを目的として、研究・開発を行った。日本語ではあまり顕著に表れないものの、中学校において英語学習が本格的に始まると同時に、英語学習困難の原因につながっていく可能性の高い読み書き障害など、小学校の段階で観察され得る学習者の特性を早い段階で発見し、英語学習のつまづきを事前に防ぐことにつなげていくことが強く期待されることが本研究よりわかった。中学校および高等学校において最も頻繁に観察される学習者の困難は、「英単語が暗記できない」「読解できない」ということであった。

これら3件の研究成果より、これらの困難さを引き起こす一つの要因として、人の情報処理過程から「音韻符号化能力の弱さにある」と仮説を立てることができた。

## 2. 研究の目的

前述した背景の中、本研究では、初等教育に在籍する学年齢の子供たちの母国語である日本語の音韻符号化能力と英語の音韻符号化能力との関係を解明し、さらには音韻符号化能力を促進する活動が英語学習に難しさを感じる学習者の英語学習に具体的にどのような改善をもたらすのかを明らかにし、その方法を教育現場に広く提供する。さらに、英語学習に難しさを持つ学習者には、英語単語のつづりの誤りが、ローマ字綴りとなっていることが頻繁に観察されている。文字が定着しづらい学習困難の解決方法としてフォニックスなどが多く取り入れられているものの、音のパターンがさほどシンプルではないために、どのような学習効果がどれくらい定着し、他の英語能力に汎化できているのかあまり検討されていない。そこで、音韻符号化能力を養成することがもたらす効果とその有用性を検討し、フォニックスの導入方法と小学校でのローマ字指導からアルファベットの導入への提言も行う。

本研究では、外国語学習能力の一つである音韻符号化能力を取り上げ、

1. 英語を不得意とする学習者の英語力と音韻符号化能力の関係を観察し、
2. フォニックスの効果とローマ字学習の効果を考察し、英語学習に困難を感じる学習者にとって、これらの功罪を議論し、
3. 英語学習に困難を感じる学習者のための音韻符号化能力養成方法の構築することを目的とした。

## 3. 研究の方法

上述の4つの目的を果たすために、A中学校(1年生97名)とB高等学校(1年生60名)の協力を得た。それぞれ以下の方法を計画した。

目的1. 英語を不得意とする学習者の英語力と音韻符号化能力の関係を観察する。

【研究方法1】中学校、高校において、音韻認識能力調査を行い、データを収集し、英語成績との関係を分析する。

目的2. フォニックスの効果とローマ字学習の効果を考察し、英語学習に困難を感じる学習者にとって、これらの功罪を議論する。

【研究方法2】中学生、高校生を対象として、小学校におけるローマ字学習が英語学習にどのような影響を及ぼしているのかを分析し、さらにそれがネガティブな影響を及ぼしている場合、フォニックス等の音韻を操作する活動が改善につながる働きをするのかどうかを調査する。

目的3. 英語学習に困難を感じる学習者のための音韻符号化能力養成方法を構築する。

【研究方法3】研究方法2で対象となった学習者を対象として音韻符号化能力を養成する指導を開発、実践し、汎化できる具体的な指導方法を構築する。

#### 4. 研究成果

(1) 目的1. 英語を不得意とする学習者の英語力と音韻符号化能力の関係を観察する。

【研究方法】中学校、高校において、音韻認識能力調査を行い、データを収集し、英語成績との関係を分析する。

【調査項目】中学校：①英語の音韻認識能力調査 ②URAWSS-English 読み書き能力調査  
③NRT 標準テスト

高校：①英語の音韻認識能力調査 ②URAWSS-English 読み書き能力調査  
③学研テスト

##### 【調査内容】

①英語の音韻認識能力調査：以下の項目からなる調査を実施

1. アルファベット文字聴覚能力5問	聴こえたアルファベット文字を選択
2. アルファベット文字書き能力5問	聴こえたアルファベット文字を書く
3. 音韻認識能力 5問	聴こえた英単語の中の母音を数える
4. ライム認識能力 5問	聴こえた二つの英単語のライムの異同認識
5. オンセット認識能力 5問	聴こえた二つの英単語のオンセット異同認識
6. ローマ字の読み能力 5問	書いてあるローマ字を平仮名に変換
7. ローマ字の書き能力 5問	書いてある平仮名をローマ字に変換

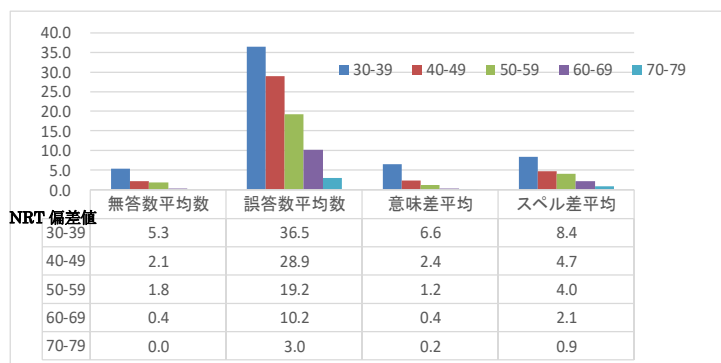
②URAWSS-English 読み書き能力調査

1. 書かれている英単語を日本語に訳す 20問
2. 書かれている英単語が音声化されたのを聴いて日本語に訳す 1. と同問題
3. 書かれている日本語を英語に訳す 20問
4. 書かれている日本語を英語に訳すが綴りは平仮名/片仮名でも可 3. と同問題
1-2 と 3-4 の正答数の差で、英語の読書能力を測定

③NRT 標準テスト (聴く・話す・読む・書く力 69問一選択肢 11問記述)

学研テスト (会話・単語・文法・読解・整序問題 大問5問)

【結果】中学校：NRT 偏差値と URAWSS-English の結果



【考察】NRT 標準テストでは、全般的な英語力を計測している。URAWSS-English では、英語の読み書き能力を測っている。URAWSS-English 「意味差」は、学習者が自力で回答した英単語の日本語訳の正答数と同じ英単語問題を読み上げされた後に回答した正答数との差を表している。一方、「スペル差」は、与えられている日本語を英語に訳した正答数とアルファベットで綴られな場合には仮名を使用して回答することを許可したうえでの正答数との差を表す。上の表に示されているように、NRT の偏差値が 30-39 の場合、「意味差」平均は 6.6、「スペル差」平均は 8.4 となっており、その一段階上の偏差値 40-49 では、それぞれ 2.4 と 4.7 という数値になっている。つまり、英語を苦手とする学習者は、英単語が視覚提示されていても、それを音韻符号化して日本語の意味と結びつけることが困難であり、音声化してもらって意味と結びつく傾向が強いと言える。ここに、音韻意識の弱さが学習の妨げとなっていることを示している。そして偏差値が上がるにつれて「意味差」「スペル差」ともに、小さくなっている。それはすなわち、英語が得意な学習者ほど、他者によって英単語を音声化される必要はなく、自ら文字を音声化して意味につなげることができていることを示していることから、文字と音との関係がきちんと定着している学習者ほど、英語学習においても高い到達度が期待できることがわかる。よって、文字と音の同定を指導し、音韻意識を高める学習を推し進めることが、ひいては英語力の向上につながるという。

(2) 目的2. フォニックスの効果とローマ字学習の効果を考察し、英語学習に困難を感じる学習者にとって、これらの功罪を議論する。

【研究方法】中学生、高校生を対象として、ローマ字学習が英語学習にどのような影響を及ぼしているのかを分析し、フォニックス等の音韻を操作する活動が改善につながる働きをするのかどうかを調査する。

【考察】音韻意識調査と URAWSS-English の結果より (上の表中ア)、ローマ字の読み書き能力と英語の読み書き能力とは比較的高い相関がでている。ともに文字と音との同定が求められる課

題であるが、ローマ字の場合はあくまでも日本語をアルファベットで記述するツールであり、英語ではない。しかし、そこで使用するのがアルファベット文字であるということから、高い相関につながっていると考えられる。また、英語力のある学習者ほどローマ字学習にも長けており、逆にローマ字学習につまずく学習者は英語学習にもつまずくことが予期されるということになる。よって、小学校3年生でのローマ字学習において難しさが観察された学習者は、その後に来る英語学習についても留意して指導に臨むべきである。

【結果】ローマ字-音韻調査

音韻意識調査		イ												ウ					
	A-1	A-2	B-1	C-1	D-1	D-2	E-1	E-2	EJ①	EJ②	JE①	JE②	EJ①	EJ②	JE①	JE②	E1	E2	
A-1									0.38	0.37	0.3	0.4	EJ①				小計	0.45	0.08
A-2	0.2								0.17	0.31	0.14	0.24	EJ②	0.884					
B-1	-0	0							0.21	0.26	0.22	0.12	JE①	0.86	0.754				
C-1	0.2	0.1	0.0165						0.21	0.17	0.11	0.22	JE②	0.779	0.819	0.671			
D-1	0.3	0.2	-0.0719	0.1			ア		0.3	0.33	0.25	0.46							
D-2	-0	0.2	0.0637	-0	0.2				0.29	0.38	0.3	0.32							
E-1	0.2	0.1	0.1466	0.1	0.4	0.2769			0.61	0.54	0.55	0.56							
E-2	0.3	0.2	0.03207	0.3	0.4	0.0794	0.5		0.51	0.5	0.46	0.6							

音韻意識調査と URAWSS-English(EJ①②JE①②)との相関

	EJ①	EJ②	差分	JE①	JE②	差分
音韻	0.7	0.7	-0.3237	0.6	0.7	0.1629

音韻調査結果と URAWSS-English の相関

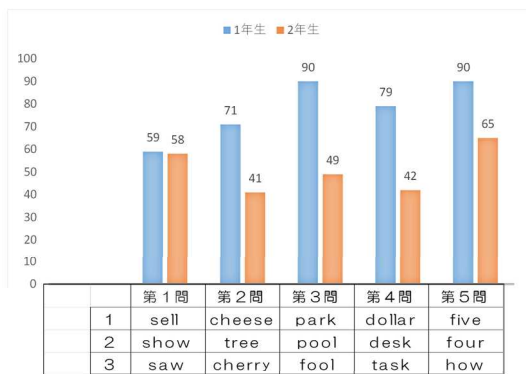
また、表中イの URAWSS-English の 4 つの項目同士の相関は非常に高いものとなっていることから、文字と音の同定に弱さのある学習者は、綴り字にも影響があることが改めて再認識された。さらに表中ウの相関係数は、0.45 が「ローマ字を平仮名書きする力とその他の音韻調査結果との相関」を示し、0.08 が「平仮名をローマ字書きする力とその他の音韻調査結果との相関」を示している。そもそも、筆者は、「ローマ字で書かれた単語を平仮名書きにするほうが、平仮名をローマ字書きにすることよりも、学習者にとっては容易であろう」と仮定していた。しかし、結果は、中高生ともに、ローマ字で書かれた単語を平仮名書きにするほうが、はるかに難易度が高く、空欄回答が多かった。ローマ字の読み書き能力は、読みのほうが音韻意識と関係していると言えるが、ローマ字書き能力については、未回答が多かったことから、さらに詳細な調査と考察を必要とする。音韻調査結果と URAWSS-English 結果間に、0.6~0.7 の高い相関が観察された。

(3) 目的3. 英語学習に困難を感じる学習者のための音韻符号化能力養成方法を構築する。

【研究方法】研究方法2で対象となった学習者を対象として音韻符号化能力を養成する指導を開発、実践し、汎化できる具体的な指導方法を構築する。

【結果】音韻指導具体例(参照 別冊報告書)

【考察】本研究の最終段階として、前述した結果をもとに、音韻意識を高める教材と文字の書き能力につながる教材の開発と試験的導入を中学校1、2年生と高校1年生で行った。具体的教材例については、別冊の報告書にまとめている。担当した教師から指導前後の生徒の変化についてコメントを得た。



音の入替問題結果(中学校1年生 VS. 2年生)

- ・改めてアルファベットの書きにつまずく生徒の存在とその難しさを認識した。
- ・指導前後で、答案未回答が大幅に減少。
- ・文字が読めるようになるに従い、生徒の顔が上がってきた。

こういった指導する教員が抱く印象は、決してテストの点数などに、顕著に表れるものではないが、生徒が学習に前向きな姿勢になることが観察されることが、教師にと

っても最大のモチベーションともなり、教師の熱意と相乗効果を生み出すことになることが示された。音韻操作練習後の音の入替問題の結果を上表に示している。この表の示す通り、1年生の方が高得点を収めている。この結果をもたらした考えられる要因は、そもそも1年生の学力が総じて高いことに加え、1年生は入学後まもなくより音韻指導カリキュラムに沿って指導が実施されたが、2年生は2年次の学習内容を進めるために、時間のある時に投込み教材としてカリキュラムに沿わず指導されたことなどが考えられる。

音韻指導は小学校英語教育においてしっかりとなされるべきであるが、中学校1年生の再スタートの時点で、系統だったシラバスの下で確実に再度実施することが、その後の英語学習へ円滑につながるために重要であろう。今後さらに本研究を改善し、現場の指導に役立てたい。

謝辞：本研究にご協力頂いた A 中学校と B 高等学校の生徒の皆さん、熱心に指導にご協力頂いた英語科の先生方、本研究の主旨をご理解いただき、訪問指導を許可頂いた管理職の先生方さらには、本研究を採択頂いた本科研制度にもこの場を借りて謝辞を伝えたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.1
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「国語は目立って問題ないのに、英語だけ??」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.2
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「単語の暗記は無理！何度も書いて！でいい？」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.3
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「わかりやすさは人それぞれ！」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.4
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「文字は机にちゃんと座って、見て書いて覚える？」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.5
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「ローマ字は日本語か英語か：小学校3年生の苦悩」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.6
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「単語を覚えてもすぐに忘れてます...」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.7
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「ついつい"I apples like."と言ってしまう...」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.8
2. 論文標題 「読み書きに困難を抱える児童・生徒に対して」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 53-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.9
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「英文法の苦手感解決に大切な単語の位置と形」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.10
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「三単現の-sの基準は何？」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.11
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「読解の過程での行ったり、来たり...」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.12
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「読むにも書くにも必要な関連付ける力」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 Vol.68No.13
2. 論文標題 読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援「わかっているけど、わからなくなる」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 35巻第4号
2. 論文標題 教材・教具・ICTのアイデア「おでんでパターンプラクティス、並べ替えパズル」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 特別支援教育	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島睦美	4. 巻 36巻第2号
2. 論文標題 授業を面白くする手作りグッズ「音と文字を視覚的につなげるためのsmall step1,2,3!忘れてもいい、思い出す努力をしよう!堂々巡りの学習法! -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 特別支援教育	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Mutsumi Iijima
2. 発表標題 Report on TEFL to Learners with Learning Difficulties in Japan
3. 学会等名 The 17th Asia TEFL International Conference and The 6th FLLT International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 飯島睦美
2. 発表標題 ローマ字学習に難しさを感じる小学生の音韻認識能力 英語学習への連携に向けての一考察
3. 学会等名 第19回小学校英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯島睦美
2. 発表標題 小学校3年生におけるローマ字学習－難しさを抱える学習者の視点から
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mutsumi Iijima
2. 発表標題 Teaching English as a Foreign Language to Japanese Learners with Learning Difficulties
3. 学会等名 The 5th IAFOR International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mutsumi Iijima
2. 発表標題 Findings from Analysis of Errors in Writings by Japanese University Students
3. 学会等名 The Southeast Asian Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤堂栄子、上田恭子、大谷みどり、入山満恵子、飯島睦美
2. 発表標題 読み書きの困難を見せる児童生徒への英語指導法の研修
3. 学会等名 日本LD学会 第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田美和、飯島睦美、小泉健輔、菅野陽太郎、関尚子、田中裕一
2. 発表標題 中学校通常学級における学習に難しさのある生徒に対する授業の工夫と支援
3. 学会等名 日本LD学会 第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯島睦美、村上加代子、山野有希、村田美和、緒方明子
2. 発表標題 中学校通常学級における学習に難しさのある生徒に対する授業の工夫と支援(2)
3. 学会等名 日本LD学会 第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯島睦美、村田美和
2. 発表標題 中学校2年生での英語学習のつまずきを探る - 読み書きの困難と言語学習適性能力 -
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯島睦美, 村上加代子, 山野有紀, 村田美和
2. 発表標題 小学校での英語学習を経た子どもたちへの中学校英語教育の可能性を考える - つまずきに対する手立てから学びやすさへの支援まで -
3. 学会等名 日本LD学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤堂栄子, 小林マヤ, 山下佳世子, 藤堂亜美, 飯島睦美
2. 発表標題 読み書きの困難がある児童生徒への英語指導 - 実践的かつ効果的な支援 -
3. 学会等名 日本LD学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯島睦美
2. 発表標題 ローマ字学習につまずく子どもたち - 英語学習へのスムーズな橋渡しのために -
3. 学会等名 日本LD学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯島睦美 大谷みどり
2. 発表標題 英語学習者のつまずきを意識した英語指導の在り方ーその理論と指導例ー
3. 学会等名 英語と特別支援教育の会 「英語学習における支援・工夫の在り方」 ~特別支援教育の視点を取り入れた英語学習を考える~
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷みどり 三浦睦美 飯島睦美 小川巖 樋口和彦 宮崎紀雅 築道和
2. 発表標題 英語教育における特別な支援の在り方：小中高大の連携を通して（1） =UDLを活用した今後の教員養成に向けての取組み-
3. 学会等名 日本LD学会台26会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯島睦美
2. 発表標題 英語学習者の英文読解における音韻意識の果たす役割ー聴覚障害学生とディスレクシア傾向の学習者への指導よりー
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯島睦美 緒方明子 中釜智子 原博子 村尾亮子
2. 発表標題 特別支援教育の視点を取り入れた英語学習を考える
3. 学会等名 第43回全国英語教育学会島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷みどり 築道和明 飯島睦美
2. 発表標題 通常学級の外国語活動における支援の在り方を考えるー特別支援教育の視点からー
3. 学会等名 第17回小学校英語教育学会
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 大谷みどり、築道和明、飯島睦美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 148
3. 書名 特別支援教育の視点でどの子も学びやすい小学校英語の授業づくり	

1. 著者名 月森久江（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社 図書文化社	5. 総ページ数 140
3. 書名 通級指導教室と特別支援教室の 指導のアイデア 中学校編	

1. 著者名 飯島睦美、村上加代子、三木さゆり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 120
3. 書名 小学校英語のユニバーサルデザイン 苦手さのある子どもつまづかせない<学びはじめ>サポートBOOK	

1. 著者名 竹田契一、飯島睦美、大谷みどり、川合紀宗、築道和明、村上加代子、村田美和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 310
3. 書名 学習障がいのある児童・生徒のための外国語教育 - その基本概念、指導方法、アセスメント、関連機関との連携	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----